

沖

俳句雑誌[おき]

1月号

沖 発行所

踵構へ

能村 研三

登四郎生誕百年

今年の一月五日で能村登四郎の生誕百年となった。単に「生誕百年」という言葉は私には縁遠い言葉に思っていたが、昨年の「沖」の四十周年に合わせて、登四郎の生誕百年を記念して企画がなされる中、この言葉の意味の重さを感じるようになってきた。登四郎はちょうど九十でこの世を去ったので今年は没後十年にもなるわけである。明治四十四年生まれでご存命の方は聖路加の日野原重明さんで、九十八歳で始められた俳句を楽しんでおられ、「俳壇」の一月号に作品を発表されていることもうれしい。

ところで、登四郎が生まれた明治四十四年の年譜をみると、次のように書かれている。

二月五日、東京都台東区谷中清水町に父二三郎（建設業）、母かねの四男として生れた。父は金沢生れ、母は生粋の江戸っ児である。母に陣痛が始まった夜、近くの葬家の柩があやまって運び込まれ、皆が顔色を失った時、祖父が「心配するな、生れてくる子はきっと男だ」と喝破したという逸話があった。登四郎の名は、祖父の生れた能登にちなんで付

鴨 狛 に み や び 心 の 仕 掛 か な

菊を焚く煙はせめて許されよ

国の名の当て字が読めず虎落笛

懇ろに印泥練るも年用意

父に無き破門除名や炭をつぐ

父の木の朴に樹魂や夕ならひ

太鼓打つ踵構への淑気かな

けたという。「私の体を流れている血液の中に、頑固で負けずぎらいな加賀生まれの父の血と、淡白で無欲で派手好みの東京生まれの母の血とがいつも相克し調和して、たぎり疼いている。兄三人、姉二人、妹一人の七人兄弟のうえ使用人が常に十人くらい起臥している大家族であった。家は繁栄していて、万事派手ごのみの家庭に育った。近くの邸町で池上秀畝、松本楓湖、田中頼樟など画人の家が多かった。」と記されている。

現在開催中の「登四郎展」の準備のために、昔の写真、資料を探す作業をした。以前登四郎が直接見せてくれた写真の中に、父が生れたばかりで中央の父母に抱かれ、建設業関係者が百人位とりかこんでいる写真があったが、この写真はとうとう見つけることが出来なかった。

「全句集」の刊行と「登四郎展」の開催を生誕百年記念として「研」ことで、登四郎に対しての新たな発見もあつて私にとってはとても意義であった。

蒼茫集



沖秋麗

北川英子

この先の一路惑はず沖秋麗
シリウスや祝ぐたび師系きらめきて
邯鄲のもつと遙かへ耳澄ます
靄籠めに葡萄酒醸す香の盆地
東京タワー少し淋しげ冬に入る
霜降や人肌の席ゆづられし

台形

細川洋子

台形にしぐれて天守台といふ
ふんだんに樂湧くごとし白式部
天守台は江戸の稜線小鳥来る
見送れば見返りをりし鰯雲
太き濡まつすぐつけてゆく良夜
鳥渡る水の地球は本当か

むかしこどもは

荒井千佐代

伏せ置ける艇身細し石榴の実
秋瀑も巖も神とぞ仰ぎ見む
鶏頭花むかし子供は汚れぬし
原色の夢が尾を引く鴝日和
懺悔了へど秋思変はらぬ重さなり
ちちははの墓まで葛の花踏み

北枕

秋葉雅治

まさをなる空にさからひ烏瓜
北塞ぎ北を枕の自適かな
かりがねの羽音高鳴り波郷の忌
遺墨（登西郎本館後二句）より享くる恩寵ふゆ日燦
地にしるす詩の光跡朴落葉
雪吊の男縄の直と女縄の弧

青春切符

安居正浩

色変へぬ松が見張りの大番所
烏瓜灯し刃傷廊下跡
異次元へ消ゆるかりがねかもしれないぬ
水面うつ時雨に鯉の静かなり
秋茄子の色艶を切る丸く切る
青春切符神の旅とは向き違へ

均す風

吉田政江

たてがみの切り揃へらる神迎へ
秋時雨百人番所の深廂
初雁や夜つびて湖を均す風
苦戦して迷路出口へ曼珠沙華
露時雨もう一度呼ぶちよさんと
遠き灯へ霧の被さる通夜戻り

水の揺れ

田所節子

つんつんと蒲の穂日ざし傾きぬ
筧より秋思の水の落つる音

雨やんで陽に透くやうな虫の声
溝蕎麦や何かよぎりし水の揺れ
かはせみのぱつと水打ち秋気澄む
夜なべせり空気のやうに夫置いて

隠れ十字

菅谷たけし

茸採り山の奥行き知りつくす
飛ぶものがあれば目で追ふ敬老日
生身魂主義も主張も申さざり
生も死も一回きりや鵲のこゑ
妻の灯と吾が灯と二つ夜長守
柿剥いて隠れ十字を壊しけり

無言劇

千田百里

機内画面に小春日の滑走路
冬麗のハーレーダビッドソン仲間
指櫛の指も古びぬ神渡し
毬栗を点景にして小原流
冬日重しと噴水の丈縮む
玻璃越しに見る冬濤の無言劇

寂 寥 辻 美 奈 子

秋思はらはらホチキスで留めておく
人類の叡智支ふる首寒し
こころぼそくて寒灯をひとつ足す
木の葉髪免れがたく母である
寂寥とバナナの皮のあり枯野
寒月を離さず万有引力よ

暁 光 楠 原 幹 子

やんごとなき色を戴き鳥兜
祝言の稜線
暁光に生る稜線秋気澄む
桐の実や蒼天わたる風乾き
祝あとのあまき疲れや小鳥来る
石垣のしかと噛みあひ雁渡し
鵲の贅木椅子の釘の抜けてをり

祝 賀 杉 本 光 祥

アイドリングストップ瀬の音さやか
祝宴の明けて御苑の初もみぢ
茶の花や昨夜の祝賀の余燼とも
椎の実のごとき眼で椎拾ふ
ぼろ市の袋小路に迷ひけり

目瞑りて落葉しぐれを聴く夜かな

芒 の 中 宮 内 と し 子

芒 原 芒 の 中 で す れ ち が ふ
乾 び ゆ く 匂 ひ の 中 の 芒 原
太 陽 に 叛 き て 熟 る る 烏 瓜
妻 入 り の 並 ぶ 越 後 路 雁 渡 る
鮎 落 ち て 山 河 淡 々 あ り に け り
祝 ぎ の 酔 ひ 残 し マ フ ラ ー 二 重 巻

何 色 の 大 川 ゆ か り

豊 年 や 雲 の 平 ら に 流 れ ゆ き
賞 品 の や う に 置 か れ て 烏 瓜
星 月 夜 麻 葉 は か く も 小 さ き 粒
労 咳 て ふ 言 葉 あ り け り 男 郎 花
何 色 の 実 を 食 べ た の か 鵲 の 声
ざ ぶ ざ ぶ と 入 っ て ゆ き ぬ 芒 原

流 星 松 本 圭 司

流 星 の 消 え る 力 が 尾 と な り ぬ
水 の 地 球 は 宇 宙 の 泪 秋 暑 し
マ ラ ソ ン の 背 を 風 が 押 す 坂 は 秋
喉 ご し に 切 れ 味 の あ り 秋 の 水

雁渡るうす墨いろの水尾ひきて
日本のどかんと晴れて文化の日

一 誌 藤原照子

遍路衣の似合ひし先師夕花野
アルプスに南や北や雁渡る
薄明の霧より現るる杉並木
遺されし夫の鉄筆文化の日
半生を拠りし一誌や秋の潮
補聴器を外して秋を惜しみけり

自己主張 久染康子

木枯一号ぴりぴりと反る松の幹
二の丸の隠れ湧水草もみぢ
ななかまど年に一度の自己主張
飴色の急階段や葉喰
葉隠れの柚子ひそひそと太りけり
冬帽は焦茶ですよね翔先生

山茶花 森岡正作

菊人形遊女のやうに窺れけり

自墮落に立冬の語の刺さり来る
よく喋る人と出くはす冬初め
山茶花を掃きて女将の顔となる
湖も山も墨絵ぼかしに冬満月
稜線のなべて撫で肩山眠る

新 藁 辻直美

花のごとくに新藁の匂ひけり
いわし雲魚眼レンズを全開す
下げ給ふ烏帽子の峰や七五三
零余子蔓豆電球をひくやうに
小春日や伸び縮みする脳の襞
菰巻くを旅の途中で見てゐたり

心のかたち 望月晴美

東御苑の秋の深みに入りにけり
露けさの石垣に聞く石の声
紫陽花は心のかたちまるく咲き
一通の文のぬくもり秋ともし
限りなき夕映すすき原つつむ
月の浜波にことばのあるやうな

潮鳴集



歩いても

篠藤千佳子

歩いても歩いても砂十三夜
丸椅子の重ね置かれて良夜かな
虫の音や素顔になつてゆく時間
煮詰めたる果実の匂ふ夜長かな
ラ・フランスやつぱり吾とどこか似る

持ち帰り自由

甲州千草

持ち帰り自由文学館前の木の実
城壁のパッチワークや小鳥来る
絹雨に十月桜なほ透けて
菊を焚くちと強情な一ところ
堪忍袋しぼんで来る良夜かな

四つの時間

古屋

元

明朝やゴシック体や鴨糸がく
天高し楽器ケースの小さき闇
太鼓打ち満月を打つ男かな
四つに割り四つの時間ラ・フランス
工場の朝礼裸木も並び

天守

林昭太郎

水桶に皿のやすらふ十三夜
松手入松の香の中に終ふ
ペン胼胝の綺麗に失せて文化の日
色変へぬ松を遺して廊下跡
鳥渡る天守を持たぬ天守台

東御苑吟行二句

『祝婚歌』

(自選二十句)

荒井千佐代

日を洩らす浦上の雲鳥総松
十字架のイエスが踏絵ふめといふ
紋白蝶汚れてをれば生き易し
復活祭パセリを森のやうに盛り
懺悔後の喉の渴きよ麦の秋
蝶の昼壺をあふるる父の骨
声出して泣きたき髪を洗ひけり
日盛りの主の手の釘を思ふべし
喃語いま言葉となれり雲の峰



早星祈りの数は怒りし数
二十六聖人の足灼けて垂れし
出棺の曲を弾きをる西日かな
十字架も棺も同じ木日雷
殉教もころびも我が祖曼珠沙華
小鳥来る小暗き受胎告知の図
耶蘇名聖ルチア毒茸踏み歩く
奏者席冷ゆ磔の主の高さ
逢ふために死なむと思ふ冬桜
オルガンに鍵かけて出づ凍つる世に
彼の冬木世紀末には方舟か

『山旅』

(自選二十句)

杉本 光祥

寒北斗よりオーロラの被さり来
渡良瀬の太陽焦がす野焼かな
息吸つて止めて春愁撮られけり
岩壁を蓑虫のごと降りて来し
残照の神の雪嶺へ合掌す
エーゲ海より初蝶の生まれ出づ
ティティカカ湖^{トトラ}葦の家は浮巢めく
四度の滝四色に落つる夕もみぢ
登山靴磨きて明日の峰仰ぐ



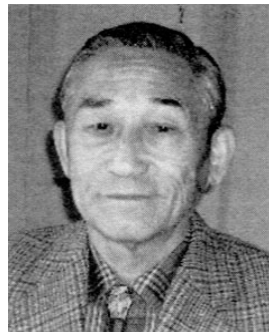
韃靼の踊り佳境に火取虫
秋天へ威を貫けり K 2 峰
登頂の無言の握手深雪晴
春暁や神の日矢受くシナイ山
父の日やピンクのシャツを贈られて
安達太良山裳裾ぼかしに蕎麦の花
蓮開花急に空気の軽くなり
「かぐや」よりいま冴え冴えと地球の出
万緑をわが目力の糧となす
鳥渡る洋の名分かつ喜望峰
葛飾や桜も我も根を張りて

『倭彩』

(自選二十句)

大沼 遊魚

時かけてときかけて舞へ春の雪
初音かな俄かに風の膨らみて
保母の耳ふたつで足らずつくしんぼ
朴の芽や我も秀つ枝を志す
山笑ふはち切れさうな握り飯
目に見えぬものを敬ひ種を蒔く
長閑なり電波時計の狂ふほど
武者幟村は倭の彩りに
身構へることなき齢更衣



荒神輿発火しさうな漢たち
二重虹山河は色を奪はれし
白妙の裳裾を広げ那智の滝
広島の時をんと花はちす
霧の海甲斐の盆地に島生れて
水ぐるま色無き風を軋ませる
千歳発銀河へ続く滑走路
園児等の羽化してをりぬ大花野
湖に浮く光の画素も十三夜
桐一葉ことばが触れただけなのに
寒卵主治医に優る妻がゐて

『桐の花』

(自選二十句)

小澤 利子

野火を見る己れの中に野火があり
すすり泣きなど知らぬはず松虫は
病室の夫が手を振り「風邪引くな」
月を待つ八十八の母とかな
からからと廻りて真夜の鳥威し
秋風や娶りたる子のはや遠く
初漁の鯨にゆらぐ夏岬
母に色あらば夜明けの桐の花
幸せかと子に問ふ半夏雨の夜



朝の蜘蛛生きねばならぬ網を張る
うすうすと晩年が見え鰯雲
白桃の無垢の手ざはり供へけり
垂直のひかりが波へ小鰹刺
手を握るだけの見舞や鳥渡る
春光や波より白き句碑の文字
祝福の師の掌大きくあたたかし
目覚めては今ある命ほととぎす
供華にと届く朝勇りの白桔梗
夕映えの海を称へて魂送る
長城に触れて来し掌よ葱きざむ

年間十二句

(自選二十句)

和田 満水

身に入むや襟に社章の穴のこり
張り終へて山の風見る雪吊師
梟や大樹の虚^うは声宿し
而して草食系の新成人
哺乳瓶の穴を拵げて春立てり
啓蟄や着信びびと胸ゆらし
新塔の高みに足場霾れり
鯉のぼり家族はいつも同じ向き
さりげなく言へるは力へちま蔓
水鉄砲ためらひ覚えはじめなり
夕焼濃しベルト坂なすランニング
石榴裂けこれからはじむ老支度



沖作品



埼玉

大石 誠

長崎

岩永 充三

東京

能美昌二郎

もう此処は君らの里ぞ雁の列
唐がらし己が辛きに身を縮め
番線に干されし軍手残る菊
水底の朽葉の下に動くもの
ひと肌てふ妙なる温みひとり酒
山里の無二の豊樂走り蕎麦
星月夜昔またぎの村田銃
豆を打つ姥は根つから人嫌ひ
周平を閉ざすどぶろくでも飲むか
桐一葉地球の裏より便りあり
箸で食ぶフランス料理敬老日
聖鐘のひびく港や野分晴
枝先にこだはりためて吾亦紅
執念を燃やし赤あか曼珠沙華
鬼灯をふくめば青さ匂ひけり

能村研三選

千葉

溝口 健也

市川市

七田 文子

佐々木 群

苦勞するひとよそに見て冬に入る
熱き粥啜り遥かにことほぎぬ
点滴は元気の技術冬りんご
絶えたるか遂に見ざりし穴まどひ
開拓の伝承薄れただ花野
長き夜やまづ鉛筆を尖らせて
括られてまだ気ままなる秋桜
干し物を膝の上に伸し小六月
大鷹の全力風の高さまで
囚はれの鷹の薄目の奥の奥
雁渡る一行ふえし処方筆
牛乳に浮かぶ薄皮冬木の芽
神々のあやとりの糸冬の虹
真鍮の把手冷たき地下のBAR
靴底の鋌や九段の冬の坂

沖作品 15句選評

*
能村研三

唐がらし己が辛きに身を締め 大石 誠

唐辛子は別名「鷹の爪」とも言うが、村上鬼城の句に「きびきびと爪折り曲げむ鷹の爪」という句がある。唐辛子の形の面白さを詠んだものだが、大石さんの句も唐辛子の屈曲した形をよく観察して出来た作品。唐辛子はナス科に属し、熱帯では多年草、温帯では一年草で、甘味種と辛味種に大別される。日本では唐辛子は薬味的なものとして捉えられ、赤唐辛子や青唐辛子が知られている。あの縮まり具合を自らの辛さのために身を縮めているのだという比喩は中々面白い把握である。

豆を打つ姥は根つから人嫌ひ 岩永 充三

何かドラマのシーンを見ているような句である。「豆打ち」は冬の季語として節分の豆まきの時にも使われるが、この句の

場合は、秋の季語の「豆干す」「豆叩く」の同義語の「豆打つ」として解釈したい。大豆や小豆を引いたものは乾いて風に吹かれるとさびしげな音をたてる。こうして乾いたものを棒で打って莢から実を取って莢の上で干す。この場合の姥の「人嫌い」は少し偏屈な人を思い浮かべるが、根は善良で寡黙でやや人付き合いの下手な不器用な人を思い浮かべた。

箸で食ふフランス料理 敬老日 能美昌二郎

洒落た高級レストランでフランス料理をいただくのも良いがただ一つ心配なのが、ナイフとフォークが何重にも置いてあるその使い方のマナー。まして敬老日に老人を交えての食事会であれば、戸惑うのも頷ける。シェフが出て来て「端で召し上がって結構ですよ」と声をかけられた途端に何か気持が明るくなってきた。

点滴は元気の技術 冬りんご 溝口 健也

溝口さんは句会でも独特の感性で俳句を作られる方として注目をしている一人。どんな事情で点滴を受けられているのかはわからないが、通院されているの処置であろうか。私の父もよく「元気の素」として葡萄糖の注射を打ってもらっていたが、この点滴も葡萄糖に近いものであるうか。葡萄糖には生理食塩水（体液に近い水溶液）にそれが入っていて、元気の素となるそう。季語として斡旋した「冬りんご」にて何かみるみる元気になられていく様子がうかがえる。

(以下略)